

小規模国家モルディブにおけるイスラーム教育の展開 ーグローバル・スタンダードと地域性の葛藤ー

服部美奈(名古屋大学)

はじめに

モルディブ共和国(Republic of Maldives)は、スリランカの南西に位置するインド洋の島国で、赤道をまたいで26の環礁(atoll)が楕円を描くように位置している。これらの環礁はおよそ1,200の小さい島々から構成されており、そのうちの約200の島々に人々が居住している。しかし、最も大きい島でさえ2から3平方マイル(約5.2から7.8平方キロメートル)を越えるものはない[Mohamed Waheed 2003a;26]。国土の総面積は淡路島のおよそ半分の面積にあたる298平方キロメートル、2010年現在の人口は31.9万人で、そのおよそ3分の1にあたる10.4万人が首都マーレのあるマーレ島に居住している[外務省 HP]。公式には国民のほぼ100パーセントがムスリム(イスラーム教徒)とされ、イスラームを国教とする。

モルディブ共和国は歴史的に幾度か外部からの支配を経験している。ポルトガルによって1558年から1573年、この地域は支配下に置かれる。その後、1887年にイギリスの保護領となり、現スリランカのコロomboにおかれた総督府から間接的に支配された。しかし、1965年7月26日に主権国家として独立するとともに国連に加盟した。

森下が指摘しているように、モルディブの教育に関する先行研究はきわめて少ない。特に日本語の文献に関していえば、ここ数年を除いて皆無といえる。しかし、英語による文献で注目すべきものとして[Bray and Adam 2001]、[Chandra 2003]、[Saeed 2003]は取り上げておく必要があるだろう。[Bray and Adam 2001]は、モルディブの中等学校試験として導入されているOレベル試験に関する考察を行っている。[Chandra 2003]は、南アジアの教育に関するエンサイクロペディア(Encyclopedia of Education in South Asia)の第9巻としてインドの出版社から刊行されたもので、モルディブの教育を概観するために非常に有益である。そして[Saeed 2003]は、モルディブにおいて学校化が進展する過程を、各地方の人々によって営まれてきた宗教を核とする教育と英語を教授言語としケンブリッジシステムを導入する国家教育との関係性、また学校教育の中心としての首都マーレと各地方の教育との関係性に焦点をあてて考察している。そして学校化がモルディブにおける知の形態とモルディブ人のアイデンティティに与えた影響を、モルディブ最南端の環礁であるアッドゥ地域出身の著者が自らの経験とアッドゥ地域の詳細な事例をもとに描き出している貴重な研究である。

しかしこれらの先行研究は、上述の[Saeed 2003]を除いてモルディブにおけるイスラーム教育の展開に焦点をあてたものではない。モルディブのイスラーム教育は、外部からの影響を受けやすい小規模国家における国民教育とイスラーム教育のあり方を考える上においても、また南アジアおよび東南アジアにおけるイスラーム教育の比較研究が可能になるという点においても示唆的である。

以下、本稿では第一にモルディブのイスラームについて概観し、次にモルディブにおけるイスラーム教育の歴史的展開を考察する。この際、注目するのは、国民教育の発展期におけるイスラーム教育の位置づけ、および国立学校と私立イスラーム学校との関係性である。ここでは特に、国民教育のなかでイスラーム教育が必修科目として位置づけられる歴史の変遷、および1977年にコミュニティ・スクールの建設が始まった頃から、多くのマクタブ(アラビア語やクルアーンの基礎を教えるイスラーム教育機関)がコミュニティ・スクールに移管され、結果としてその後の私立イスラーム学校の多くが初等・中等教育段階から就学前教育段階に移行する経緯を考察する。そして、これが地方における私立イスラーム学校の周辺化を招いた可能性を示す。

第二に、上記の傾向を示す一つの事例として、モルディブ最南端に位置するアッドゥ環礁のアッドゥ・ハイスクール(Addu High School)を考察することを通して、モルディブにおける私立イスラーム学校の周辺化の傾向を示したい。

第三に、首都マーレへのイスラーム教育機関の集中化の傾向について考察する。1980年以降、政府による国立イスラーム教育機関の整備が進められた。同時にエジプトのアズハル大学への留学生送り出しも1982年から始まった。これらの事例として、3つのイスラーム教育機関、つまり、1)高等教育段階のイスラーム学院(Institute of Islamic Studies)、2)中等教育段階のマドラサ・アラビア・イスラミヤ(Madrasah Arabiyya Islamiyya)、3)ノンフォーマル教育機関の聖クルアーンセンター(The Center for Holy Quran)を取り上げたい。

これらの考察を通して、モルディブ官製のイスラーム教育機関が増加し、官製のイスラームが浸透していくと同時に、地域のイスラーム教育が消滅していく可能性があることを示したい。そして最後に、モルディブにおけるイスラーム教育の特徴を考察する。

1. モルディブにおけるイスラームの展開—1970年代末から1980年代

ここでは、モルディブ宗教省によってガユーム政権期(1978—2008年)の1990年にディベヒ語と英語の二言語で出版された『イスラームの遺産(Islamic Heritage)』を参考に、モルディブ政府が公認するモルディブにおけるイスラームの歴史を確認しておきたい[Department of Religious Affairs 1990]。

それによると、イスラームはアラブの旅行者(Arab travelers)によってモルディブにもたらされ、イスラーム暦548年のラベウル・アヒール月(month of Rabeel Akhir)に、スルタンがイスラームに改宗したことが知られている。仏教徒であったスルタンのイスラームへの改宗は、当時、マーレで毎月決まった時期に現れる邪悪な兆(evil manifestation)を退治した一人のイスラーム宗教学者の説得に応じたものであった。この宗教学者はモロッコあるいはペルシアの出身であったと考えられている。そして公式の歴史では、このときイスラームがモルディブの国教(state religion)になったとされている。ただし、スルタンのイスラームへの改宗と同時に、モルディブ全体が一斉にイスラーム化されたわけではなかったのは、現実的には当然のことだろう。言い伝えによれば、ある地域がイスラーム改宗前の信仰に戻ったことがわかると、スルタン自身がその地まで船で赴き、背信者を諷め、イスラームに回帰させたということも知られている[Waheed 1990b;27-28]。これが、モルディブへのイスラームの到来として語られている内容である。

1965年の独立以降、1978年に大統領に就任したマウムン・アブドゥル・ガユーム(Maumoon Abdul Gayoom)政権期にイスラーム復興が活性化したといわれている [Moosa 1990;33]。この時期、特に1970年代の終わりから1980年代、宗教省(Department of Religious Affairs)は様々な形でモルディブ国民の宗教的自覚を高める事業を展開している。具体的には、Aleege Machchah Ayyeh (英語で Light upon Light)という週一回のラジオ番組や、Hidaayathuge Ali (英語で The Light of Guidance)というテレビ番組の開始といった放送メディアによる事業があげられる。また、ラマダーン月の宗教的な諸活動も宗教省によって活性化された。具体的には、ラマダーン月のクルアーン暗誦・読誦の奨励、マーレ島のモスクにおけるアスルの礼拝後の説教、タラウェイとよばれるラマダーン月に行われる日没後の礼拝の定着化(observance)などである[Moosa 1990;32]。

一方で、国内の思想統制といえる活動も、宗教省によって上記の活動と平行する形でこの時期に行われている。たとえば、マーレ島以外の他の環礁(アトール)に存在するモスクに関する調査が実施され、マーレ島からこれらの環礁(アトール)に対し、宗教的指導を提供したり宗教的な質問に答えるための専門団が派遣されている。そして宗教省は、現存するモスクを管理すると共に、新しいモスクを建設した。また、国内に輸入される宗教関係の書籍の検閲を強化し、国内で翻訳・出版される宗教関係の書籍は、宗教省による承認を必要とすることとした[Moosa 1990;31-32]。

国内の宗教的自覚を高める取り組みに政府が助言を与える機関として1984年に創設されたのが、地方モスク・カウンシル(Local Council for Mosques)である。このカウンシルの決定事項は、宗教省によって実行に移される。このカウンシルも、モルディブ国民の宗教的自覚を高め、イスラーム文化(Islamic culture)を浸透させる目的のもと、Al-Minbar という年4回刊行の雑誌を出版している。またマーレ島内の特定のモスクで毎週木曜日の午後に行われる Dars-al-Usboo(英語で Lesson of the Week)とよばれる学習会を主催している。この他、地方の環礁(アトール)に対する取り組みとして、地方の環礁のモスクに関する情報を収集すると同時に環礁の人々に宗教的助言を与えるという目的で、カウンシルの成員を地方の環礁(アトール)に派遣している。さらに、1990年当時、モルディブ国内で最も人口密度の高い11の各島(マーレ島を除く)に近代的なモスクを建設するプロジェクトを実施し、この最初のモスクとして、モルディブ最南端に位置するアッドゥ環礁のフェイドゥ(Feydhoo)に近代的なモスクが建設された[Moosa 1990;31]。

この他、ザカート(喜捨)省(Department of Zakaath)が1983年4月1日に、イスラミックセンター(Islamic Centre)が1984年11月11日に設立された。このイスラミックセンターは、6千人を収容できるモスクに、イスラーム図書館と教室、コンベンション・ホールが付設されている。国家主催のクルアーン暗誦・読誦コンクールは毎年ここで開催されている[Moosa 1990;30-31]。

以上、ここでは1970年代末から1980年代のモルディブにおけるイスラーム政策の展開に注目して考察してきた。モルディブではこの時期、政府が積極的に関与したイスラーム政策を展開している。それは上記にみたような各種のイスラーム関連施設の創設に顕著にみられる。政府の政策が、モルディブ国民の宗教的自覚を高めることを目的としたものであったことは間違いないであろう。しかし一方で、政府によるイスラームへの積極的関与によって、それぞれの環礁(アトール)の宗教活動が管理・統制される結果をもたらした側面も看過できない。またこの時期、中央政府によって作られる官製のイスラームが、地方の環礁(アトール)に浸透し、結果として多様性をもった地方のイスラームが画一化の方向へ収斂された。この過程のなかで、イスラームの中心としてのマーレ島と、周縁のイスラームとしての地方の環礁(アトール)という図式が形成されていったと考えることができるであろう。

2. モルディブにおけるイスラーム教育と国民教育の交差

次に、モルディブにおけるイスラーム教育と国民教育の歴史的展開を概観しておきたい。ここでは特に、学校教育が普及するなかで伝統的イスラーム教育がどのように変化したのか、同時に学校教育のなかでイスラーム教育がどのように位置づけられたのかに注目して考察したい。

2-1. モルディブにおける伝統的イスラーム教育の変容

イスラーム教育の伝統的形態は3種類、つまり edhuruge (もしくは kiyavaage)、makthab、そして madhrasa から成り立っていた。そしてこれらの教育機関は個人あるいは島の共同体によって運営されてきた[Ministry of Education 1994;1-2]。Edhuruge (もしくは kiyavaage) は、子どもたちを家に集め、クルアーン、ディベヒ語、アラビア文字、そしてクルアーン朗誦を学習する場であった[Chandra 2003;8]。これらの伝統的な教育形態は1920年代以降、徐々に変容を経験することになる。

1927年、首都マーレに最初の政府学校が設立された。この学校は設立当初は男子に限定されていたが、1944年になると女子にも門戸が開放された[Chandra 2003;9]。この学校では設立当初から20年間、アラビア語、宗教教育、ディベヒ語、そして基礎的な算術が教えられるにとどまっていた。しかし同時に、最初の憲法が制定された1932年に重要な変化が起こった。憲法的一条項として基礎教育を整備する政府の責任が初めて認められ、その結果として1932年12月に国家の教育普及を管轄する省が設立された[Ministry of Education 1994;2-3]。

初代大統領のリーダーシップのもと、1940年代から1950年代には顕著な教育の発展がみられた。政府は島の共同体やアトール(環礁)の行政官、マーレ島の行政官に対し、地域の子どものために教育施設を供給するよう奨励し、多くの島では自らの財源で学校を設立運営した。1945年までに、最低でも makthab レベルの学校が各住民島で運営されるようになった。この makthab は、下級初等教育レベル(lower primary level)の教育を提供したとされている[Chandra 2003;9]。そして、アトール(環礁)からリクルートされた優秀な生徒を就学させるアトール(環礁)マドラサ(atoll madhrasa)がアトール(環礁)行政によって設立運営された[Ministry of Education 1994;2-3]。ここでいう makthab および madhrasa は、全国統一のカリキュラムがこの時点ではまだ導入されていなかったとはいえ、従来のマドラサ、つまり村の導師や高名なイスラーム学者が個人的に主宰する makthab や madhrasa とはすでに性質を異にしているといえるであろう。なぜならば、少なくともこれらの makthab と madhrasa は、政府主導のもと共同体やアトールの行政官によって設立されているからである。

アトールスクール(atoll school)は、優秀な生徒たちが島の行政を担い、指導性を発揮できるような教育も行った。また、なかでも優秀なアトール(環礁)の生徒に対しては、彼ら専用の2つの宿泊施設が整備され、マーレでの教育が提供された。このようなマーレでの教育は当時、生徒が政府の要職に就くための基礎的な学習を提供すると同時に、国家と宗教に対する愛情を生徒に教え込ませることを目的としていたとされている。

その後、1960年に導入された新たな教育政策は、その後のモルディブの教育に深い影響を与えるものであった。この時、首都マーレに英語を教授言語とする2つの学校が設立され、同時にカリキュラム編成および教育方法にイギリス式が採用された。これに伴い、外国人教師や英語の教科書も導入された。英語を教授言語とする学校がマーレに設立されたことで、モルディブには教授言語とカリキュラムを異にする2種類の学校形態が並存することになった。しかし反対に、マーレ島以外では、同時期にアトール(環礁)の教育に対する政府の支援や奨励が減少(withdrawal)したことによる島々の学校の衰退がみられるようになったとされる[Ministry of Education 1994;3]。

しかし1970年代末の政策転換は、アトール(環礁)における教育機会の顕著な発展をもたらした。1978年、統一された国家教育システムへの移行と、より公平な設備の供給を促進する決定がなされた。政策では初等学校(1-5学年)とミドルスクール(6-7学年)に重点が置かれ、1-7学年を対象とする統一カリキュラムが編成された。それに伴い、アトール(環礁)における新しい学校の設立も進められた。具体的には、各アトール(環礁)にアトール・エデュケーション・センター(Atoll Education Centre; AEC)、そして一つの島のみからなるアトール(環礁)ではアトール・プライマリー・スクール(Atoll Primary School; APS)が設立された。実は、アトール・エデュケーション・センターは、各アトールや島が運営する学校に対してモデルスクール的な役割を果たすことを設立の理念としていたものの、首都マーレの学校を理想とする住民の教育への高い希求に遭遇し、その大部分は実現しなかったとされている。つまり、各アトールや島が各地の特性を生かした教育活動を行うことも、このアトール・エデュケーション・センターに期待されていたと考えられるが、住民が望んだのは首都マーレで行われている「進んだ」教育に近づくことであったということであろう。現在、アトール・エデュケーション・センター、アトール・プライマリー・スクールともに、初等教育を担う上で他の学校と比べてほとんど現実的な相違はない[Ministry of Education 1994;4]。

このような変化は、各地が維持してきた教育の伝統が、英語を教授言語とするイギリス式の教育システムへと統合される結果をもたらしていった。

2-2. アッドゥ環礁のアッドゥ・メイドゥ(Addu Meedhoo)地域における教育の変遷

次にもう少し地域を限定し、ある地方の教育の変遷を追っておきたい。ここで取り上げるのは、アッドゥ環礁のなかのアッドゥ・メイドゥ地域である。ここでアッドゥ・メイドゥ地域を取り上げるのは、後述する私立イスラーム学校が同じくアッドゥ環礁にあり、アッドゥ・メイドゥ地域の教育の変遷と類似性を持っていると推測されるためである。文献は主に[Saeed 2003]を用いることとする。サイドは、イスラーム教育の教師であった祖父と自らの経験をもとに当該地域の教育の様子を描き出している。

2-2-1. 1970年代までの変遷

サイドによると、1950年代以前のアッドゥ・メイドゥ地域における教育の主な目的は、子どもたちにクルアーンの読み方およびディベヒ語とアラビア語の読み書きを教えることであった。アラビア文字を習い始めたばかりの子どもには Veshefela を用いて教えられた。Veshefela は木製の薄い板から作られ、端に高さ1センチほどの木製の枠が付けられている。その上に白砂を散りばめ、Liyeyshi とよばれる

椰子の葉の芯がペンとして使われた。Veshefela に書くことは Veshefela Edun とよばれる。通常、子どもたちはおよそ5歳になると Edhuruge に通い始めた。Edhuruge は大抵、これを教える教師宅であったようである。子どもたちは周囲にある4-5軒の Edhuruge のなかから両親が選んだところへ通った。子どもたちは7人から10人の同年齢の子どもたちと共に車座になって立ち、Veshefela に書かれた内容を教師のあとについて朗読する際、手は胸に置かれた。最初にアラビア文字が一文字ずつ教えられる。アラビア文字を理解できるようになると、次に母音を付した文字が教えられる。母音を付してアラビア文字を教えることを、ディベヒ語では Fili Jehun と呼んでいる[Saeed 2003;197]。

子どもたちが母音を付して読み始めると、両親は子どもに Fela を渡す。これは約30cm×20cmの大きさと厚さが1cmほどの木製の厚い板で、上部の幅が少しだけ狭くなった形状をしたものである。最近では厚めの白い合板から作られているが、それ以前は土で板を擦って白くして用いていた。また最近ではホワイトボードマーカーがペンとして用いられるが、今でも並行して、料理鍋に付着した黒いススからインクを作り、竹製のペン先につけて Fela の上に文字を書く方法が用いられている[Saeed 2003;198]。教師は Fela に書き、正しい発音が確実にできるよう、数回、教師の後について読ませる。子どもは Fela を家に持ち帰り、母親や年上のきょうだいとともに練習する。子どもが流暢に読めるようになると、母親が次の学習のために Fela の片面を消して次の学習に備える。このように、片面で新しい学習を、もう1つの面でその前の学習をするという方法が Fela を用いて行われていた。母音を付したアラビア語の読みを学習する過程は Akuru Ugenun、そしてこのような教授法は Qaidhah Baghdhadhi とよばれた[Saeed 2003;198]。

子どもがアラビア文字を読めるようになると、クルアーン学習が始まる。子どもたちは日没後の礼拝から夜半の礼拝の間の時間、家でクルアーンを朗読するのが日常であったという。子どもは開扉章や短い章で始まる Amma Foy とよばれる本を渡され、Amma Foy が修了すると、自分用のクルアーンを持つ準備が整ったことを意味した。Amma Foy の修了は、盛大な祝いの節目でもある。またサイドによれば、一方で、以前はクルアーンが読めない子どもは家族から引き離され、奴隷として扱われたという。名目上は子どもがクルアーンを読めるように自分の家族から引き離し、別の家族に預けられるということであるが、歴史的にみると彼らは生徒というよりも奴隷として扱われたとされている。[Saeed 2003;199]。

基礎的なアラビア文字やクルアーン学習を行う Edhuruge とは別に、より高度なイスラーム学を修めるためには別の学習が必要とされた。ここでは[Saeed 2003]からサイドの祖父の経験をみておきたい。サイドの祖父は5歳になると、彼の義理のおじにあたる Aisaadhari Beybe のもとでクルアーンとフィクフ(イスラーム法)を学び始めた。学習は夜に行われ、昼間はおじとともに漁に出かけたという。おじはサイドの祖父が11歳のとき他界した。その後しばらく、サイドの祖父は Dhonmanikuge Ali Beybe という人物のもとで学んだ。サイドの祖父は日中は漁に出ていたため、たいてい夜に Ali Beybe のもとに通った。Ali Beybe は学徒が持参するいかなるキタブも教えたが、フィクフ(イスラーム法)が大半だった。なぜなら、島にある希少なキタブといえば Abu Shuja や Fatthu Kithab などのアラビア語で書かれたフィクフのキタブだったからである。そして彼は1つのレッスンを1人の学徒に教えた。彼は5、6人の学徒のみ同じ時期に教えていたため、このような方法も彼にとってはさほど大変ではなかった。また彼は月に一度や週に一度、都合に応じて来る学徒にも教えていた[Saeed 2003;199-200]。

モルディブで最初の制度化された madhrasa は、1927年にマーレに設立された Madhrasathul Salahiyya とされる。当時、アッドウ環礁では、ヒッタドゥー(Hithadhoo)在住の Husen Rahaa が最も著名なイスラーム学者であり教師であった。フセイン・ラハアは、エジプトのアズハル大学を卒業しており、

彼が主宰する *madhrasa* が、アッドゥ環礁で組織化された教室での学習活動(classroom teaching)の始まりであった。サイドの祖父は彼のもとで勉強するためヒッタドゥに行き、2年間、金曜日を除く毎日、*madhrasa* へ通った。これが、サイドの祖父が最初に受けたアッドゥ環礁での組織化された *madhrasa* 教育の経験であったという[Saeed 2003;200-201]。

フセイン・ラハアが主宰していた学校(正式名称は不明)の様子は、サイドの祖父によれば以下のようなものであった。1年生(first class)の生徒たちは朝7時にモスクへ行った。4年生のクラスのなかで最も優秀な6名が、1年生のクラスを教えた。この6名の生徒たちは *Musaaids* と呼ばれた。フセイン・ラハアは8時に到着した。彼が来ると、子どもたちはモスクの後方に2年生、3年生、4年生の順番で列を作って座った。フセイン・ラハアは生徒の前に置いてある枕の上に座り、2年生から教え始める。生徒たちは前回学習した内容を彼の前で読んだ。そして彼は、一番良くてきた2人の生徒に新しい内容を教えた。これが3つのクラスで繰り返された。このセッションが終わると、次にクルアーンを教え始める。彼はクルアーンをすべての子どもたちに同時に教えた。誰かが前回終わったところに印をつけ、彼がそこから *Maqra* を読む。2, 3人の子どもたちが *Maqra* から彼の後に続いて読む。朝のセッションは11時半で終わった[Saeed 2003;201]。

午後はすべての生徒が13時にマドラサ *madhrasa* へ行く。3つのグループ用に床にマットが敷かれ、生徒は車座になってそのマットの上に座る。前回、フセイン・ラハアと一緒に読んだ生徒が最初に読み、その後、1人1人の生徒が続く。皆が読み終える時まで、皆が読むことができるようになっていた。次に、*Musaaid* が、読んだ内容のなかで何が議論されているのかを尋ねる。生徒たちが答える。もし生徒が答えられなければ、*Musaaid* が生徒たちに説明する。ある時、生徒たちは4つのキタブ、すなわち、ナフ(*Nahoo and Lafz*)、フィクフ(*Fiqh*)、アフラック(*Akhlaq*)、ハディース(*Hadhith*)を読まなければならなかったため、皆が答えるための十分な時間がなかった。通常は、1クラスに10人から12人の生徒たちがいた。*Musaaids* は生徒でもあったが大人との境界に属していた [Saeed 2003;201]。

サイドの祖父が3年生になったとき、フセイン・ラハアは教えることをやめ、生徒たちを別の場所に送った。彼は3つの環礁の環礁長となり、のちにアッドゥに独立政府を作ろうとしたその他のアッドゥの人々と共に追放された。このアッドゥにおける最初の *madhrasa* の閉鎖は、モルディブにおける政情不安の前ぶれだったという。1942年から1943年にかけて、モルディブ全体が変動の波のなかに置かれた。イギリスが北部の *Haddhunmathi Kela* と南部のアッドゥ環礁のガン島に空軍基地を設立したが、モルディブ中央政府と島の地方政府は、環礁にも島にも全く事前交渉をしなかった。そのため、中央政府は北部と南部の環礁で暴動にみまわれた[Saeed 2003;201-202]。

中央政府と中心から離れた環礁との間で不和が起きている間、*Dhonamikuge Ali Beybe* は、自宅で教えるのではなく、メイドゥの中心的モスクであるマアミスキイ *Maamiskiy* で教え始めた。しかし、当時の島の首長であった *Dheshenaage Ibrahim Beybe* と *Dheshenaage Beybe* は、モスクで教えるよりも、メイドゥにマドラサを設立することを決めた。彼らは *Dhandi Fan* とよばれる小枝と編んだ椰子の葉で教室を作り、教師のためにそのなかにハンモックを置いた。こうして新しい *madhrasa* は1943年12月29日の水曜日に開校したとされる。この1つの教室だけのマドラサには、女子マドラサと男子マドラサが設けられていた。男子は午前に通い、女子が午後に通った。学校設立当初のカリキュラムの大半は、アラビア語とフィクフ(イスラーム法)だった[Saeed 2003;202]。

前項でみたように、1940年代は中央政府が地方に対して教育普及を促した時期であった。*Dhonamikuge Ali Beybe* が主宰するマドラサが設立された時期と重なる。教育普及の促進を進める中

中央政府は、政治的な統合をもたらすための公的な装置として、島々における学校の普及をみていた。サイドによれば、メイドゥ地域にマドラサが設立されて2年のうちに、学校の教科書がマーレ言語 (Male Bas) で出版され、マーレ言語が学校の教科として教えられ始めるようになったという。アッドゥ・メイドゥ地域の学校もまた、マーレで出版された教科書を採用した。サイドはこのような状況を、国家が組織した「共通の」学校化過程 (“common” schooling process) の始まりと表現している[Saeed 2003;202]。「共通の」学校化過程が始まるなかでアッドゥ環礁の地域性とイスラーム教育を堅持するマドラサが設立されたことは、この地域の教育の歴史と独自性を考える上で重要であろう。しかし、1940年代に設立されたマドラサはその後、消滅していった。

1960年代末、中央政府はノンフォーマル教育を含むすべての教育機関に政府への登録と許可を義務づけた。当時、島にはいくつかのマクタブやイスラーム学者が自宅で運営していたノンフォーマルのイスラーム教育機関があったという。サイドの祖父も自宅を使ってプライベートの形でイスラーム教育を行っていた。しかし、政府による登録の義務づけが行われたため、一部屋のみ彼の家にもう一部屋アネックスを建てて1969年に自宅を学校として登録し、1970年代初期にマクタブ makthab を開いた。このアネックス部分を教室として登録し、クラスは家族部屋と教室のベランダで行なった。このように、1940年代に設立された古くからのマドラサは消滅したが、1970年代後半までに Elhege Beybe のリーダーシップのもと、地域のイスラーム学者によるイスラーム教育は復活し始めていたという[Saeed 2003;203]。

祖父のマクタブで学んだサイドによると、マクタブでは床の上に座り、ベンチを筆記用の机として使った。その頃までにはペンとノートが使われるようになっていた。サイドは彼女の母が教わった同じ内容、つまり、クルアーン、イスラーム学、算術、ターナ語の読み書き、そして初歩のアラビア語を勉強した。また、マーレのカリキュラムからモルディブの歴史と地理が除外されたのと同様、モルディブの歴史と地理は教えられなかったという。アラビア語は、イスラーム学がディベヒ語で書かれたテキストを使って教えられるようになると、次第に重要性を失っていった[Saeed 2003;202]。

1970年代後半、サイドの祖父は、英語のアルファベットを勉強するためマーレに行った。当時の大統領イブラヒム・ナシール Ibrahim Nasir は、ディベヒ語の筆記にターナ文字の使用を廃止し、ローマ字を使用することを決定した。マーレから届く金曜礼拝の説教がローマ字で印刷されるようになったため、サイドの祖父はローマ字の読みを勉強するためにマーレまで行かなければならなかったという。彼はマーレから戻ると、マクタブの英語の教師としてイブラヒム・ワヒード Ibrahim Waheed という地元イスラーム学者を招いた。そして、マクタブの生徒たちは1978年に英語の読みを勉強し始めた。しかし、その年の終わりに大統領となったマイムン・アブドゥル・ガユーム Maumoon Abdul Qayyoom は、モルディブの公式な文字としてターナ文字を復活させることとなった[Saeed 2003;204]。

1970年代までのまとめとして、サイドは以下のように述べている。「この時期の終わりに近づくにつれて顕著に異なってきたことは、モルディブの首都であるマーレで開発されたカリキュラムへの移行が挙げられる。それまでアッドゥの人々はマーレを教育の中心として見ていなかった。伝統的にモルディブの歴史のなかで、人々はイスラーム学者がいるところに行ったのであり、マーレがモルディブにおける学問と教育の中心ではなかった。以前は、マーレのエリートの子どもたちはメイドゥのイスラーム学者に学ぶためにアッドゥ・メイドゥに来ていたのである。Meedhoo Bondo Fandiyaaro Thakkaan は、Vaadhoo Dhanna Kaleygefaanu について学ぶために Huvadhu Atoll Vaadhoo へ行った」[Saeed 2003;205-206]。

2-2-2. 1980年代から1990年代

1978年に始まる新体制になると、世界銀行や国連といった海外の援助機関がモルディブに関心を持つようになる。1978年、ユニセフの援助によって設立された最初のコミュニティスクールがモルディブに開校した。そして、全国統一カリキュラム作成の取り組みが始まり、1983年10月にナショナル・カリキュラムが公布されると、地方の教育はそれまでそうであったようにコミュニティの責任ではなく国家の責任になっていった[Saeed 2003;206]。

サイドによれば、1980年代始めまで、島の人々は何をどのようにどこで教えるかを自らで決めてきたという。彼らが最初に学校の校舎を建てたとき、それは自らの財源で自らのイニシアティブによるものだった。彼らが以前のように伝統的なイスラーム教育機関の学校スタイルではなく、マーレで普及しているディベヒの学校スタイルの使用を決めたとき、その選択は自らが決定したものであった[Saeed 2003;206]。

1983年、政府は財政的にすべての責任をもつ初等学校としてアトール・マドラサ(Atholhu Madhrasa)をフルフ・メイドゥに開校した。このことは、教育へのアクセスという観点からみると望ましい変化をもたらした。校舎はユニセフの援助で設立され、保護者は制服やかばん、靴、教材費を負担しなければならなかったものの、島のすべての子どもがこの新しく設立された美しい初等学校に通い始めるようになった。教員の給与も政府によって負担され、教員数が増加した。このことは良かれ悪しかれ、国家による学校教育の管理が本格的に始まったことを意味した[Saeed 2003;207]。

教育内容の側面をみると、1983年のナショナル・カリキュラム導入はモルディブのすべての子どもたちに適用された。アトール・マドラサで最初に教えられた科目は、イスラーム、ディベヒ語、数学、英語、環境学(Environmental Studies)、芸術(Art)だった。また、以前は別々の科目として教えられていたクラーンとフィクフ(イスラーム法)がこの時、イスラーム学(Islamic Studies)という1つの科目に統合された。同時にアフラック(倫理、価値や善行)はカリキュラムから削除された。さらにモルディブ史およびモルディブ地理は、一般科学(General Science)と社会科(Social Studies)を統合した科目である環境学に置き換えられた。そして、カリキュラムには実践芸術(Practical Arts)と体育が入っていたが、初期の段階では教えられていなかったし、現在に至るまでほとんど留意されていない[Saeed 2003;207]。

教授言語に関する措置として、教育開発センター(Education Development Centre)は、マーレの学校のために英語で書かれた教科書を、環礁の学校のためにディベヒ語で書かれた同じ内容の教科書を作成することにより、地方のモルディブと急速に都市化するマーレの相違に配慮した。つまり、英語がマーレの学校の教授言語として使用される一方で、メイドゥをはじめとする環礁の生徒たちはディベヒ語で学習した。しかしこのような状況は好意的に受け取られるばかりではなく、教育開発センターの意図に反して、メイドゥの子どもたちは二重の意味で不利な状況に置かれていると理解された。つまり、地方の島の人々は間もなく、自分たちの子どもがディベヒ語で学習している一方、首都マーレの子どもたちは英語で教えられているという事実は、自分たちの子どもが新しい労働市場や専門職へのアクセスにおいて不利になると考えた。それゆえ、アトール・マドラサでは1991年、子どもたちにマーレ標準のディベヒ語(Male Bas)で教えつつも、英語で書かれた教科書が使用され始めたという [Saeed 2003;208]。

2003年の時点で、メイドゥには政府の財源によって設立された学校が2校ある。初等学校と中等学校それぞれ1校である。これらの学校の学校名には以前は「マドラサ」が使用されていたが、現在は「スクール」という名称が使用され、モスクから離れた場所に設立されている。具体的には現在、この学校は Ghazi Shamsuddin School という名称の学校になっている。この学校名称は、メイドゥで有名な裁判長の名前からつけられたものである。Ghazi Shamsuddin はマーレで裁判長に就任しているとき、金曜礼拝の説教の際に、君主を賞賛するくだりでわずかではあるが間違いを犯したという罪で家族とともにマーレから島へ追放された人物である[Saeed 2003;208]。

初等学校として設立されたアトール・マドラサは、1997年に6年生から10年生の子どもを受け入れる政府立の中等教育学校となった。教員の大半はインド出身である。子どもたちはGCE-Oレベル試験用のシラバスを用い、イギリスから輸入された推薦教科書を使用している。そして子どもたちは10年生つまり16歳でGCE-Oレベルの試験を受けるようになった[Saeed 2003;208]。

以上、1980年代の動向として、第一に、中央政府および国際機関による教育普及の促進とナショナルカリキュラムの導入は、マーレ以外の環礁における学校教育の普及をもたらしたことが挙げられる。しかし一方で、これにより、教育のイニシアティブは地方から中央へと移った傾向が読み取れる。同時に個人が主宰してきたマクトゥブやマドラサは政府への登録を義務づけられたことにより、次第に国家の管理が及ぶようになった。このことが、地方のイスラーム教育の衰退を招く結果になったと結論づけることはできない。しかし少なくとも、学校として登録することの影響が従来のマクトゥブやマドラサに全く影響を及ぼさなかったということもできない。第二に、英語を教授言語とし、ナショナルカリキュラムを導入した学校が次第にマーレ島以外の環礁地域においても望まれたという点も重要であろう。つまり、中央政府が一方的に学校教育を普及させたのではなく、受けての側にも中央政府が提供する教育への強い需要があった。その意味で、結果としてマクトゥブやマドラサが衰退したとしても、それはモルディブ社会のなかで起こった、ある意味では不可避の変化だったといえる。

3. 私立イスラーム学校の周辺化—アッドゥ環礁アッドゥ・ハイスクール (Addu High School)

以上、ここまでではモルディブにおける学校教育普及とイスラーム教育の全体的動向およびアッドゥ環礁を中心に考察してきた。しかしながら、上記でみたような状況のなか実際に地域で何が起こったのかを知るためには、具体的な事例を取り上げつつ、より詳細に考察することが必要である。そこで、本項ではアッドゥ環礁のなかで前述したメイドゥ地域の対岸に位置するヒッタドゥに設立された一つの学校とその学校に携わった人々に焦点をあてて考察する。

3-1. アッドゥ・ハイスクールの現状

アッドゥ環礁のヒッタドゥに設立されたアッドゥ・ハイスクールは、2010年11月からアッドゥ環礁で唯一、11年生と12年生、つまりケンブリッジ中等教育修了資格(General Certificate of Education)のAレベル(Advanced Level)に対応した後期中等教育段階のカリキュラムを提供する国立後期中等学校となっている。そのため、この高校ではAレベル試験に対応して商業ビジネスストリームと科学ストリーム

が提供されており、2010年時点の教育省の統計によれば、10年生120人(商業ビジネスストリーム70人、科学ストリーム50人)、11年生140人(商業ビジネスストリーム89人、科学ストリーム51人)、12年生119人(商業ビジネスストリーム74人、科学ストリーム45人)が在籍している [Provisional data 2011, Ministry of Education]。この時点で10年生があるのは、前期中等教育学校から後期中等教育学校への移行が実施された直後であることを反映しているため、将来的には11年生と12年生のみになる予定とのことであった。教授言語は英語である。ただし、ディベヒ語とイスラームだけは教授言語としてディベヒ語が使用されている。イスラームは週に1時間のみ提供されている。

一見すると通常のハイ・ハイスクールにみえるが、実はこの学校は、有志のイスラーム学者と実業家により、1988年に設立された私立マドラサとしての前身をもつ。以下、その歴史の変遷を追ってみたい。

3-2. 歴史的変遷

3-2-1. 設立の経緯

前述したように、この学校は1988年3月16日、アッドゥ地域の有志のイスラーム学者と実業家によって設立された私立マドラサであった。設立当時の学校名称は、マドラサ・イスラミヤ (Madrasa Islamiyya)である[Introducing Madrasa Islamiyya, 1997]。マドラサのモットーは、クルアーンアラク章の第5節(AI-A' laq:5)から引用された He(Allah) taught man that which he know not とされている。

この学校の設立に携わったイスラーム学者と実業家は以下の人物たちであるとされている。

シャイフ・イドゥリス・フセイン Sh.Idrees Hussain Ali (Jamia Darul Uloo, Gujarat, India 卒業)

シャイフ・フサイン・ラシード・アフメド Sh. Hussain Rasheed Ahmed (Umm-al-Qura University, Makkah and Higher Diploma from King Saud University 卒業)

ムハンマド・アフマド・ディディ Mohamed Ahmad Didi (local secondary certificate 卒業)

シャイフ・イブラヒム・ルシュディ Sh Ibrahim Rushdhy (Madina University, Madina 卒業)

シャイフ・アブドゥル・ラティーフ・ウマール Sh.Hassan Latheef Moosa (Islamic University, Medina 卒業)

名前の頭につけられている「シャイフ」は高名なイスラーム学者の尊称である。上記のうちの2人(イブラヒム・ルシュディ氏とフサイン・ラシード・アフメド氏)のライフヒストリーについては後述するが、ムハンマド・アフマド・ディディ氏が地元の中高等学校を卒業している以外、インド・グジャラートのジャミア・ダールル・ウロ、サウジアラビア・マッカのウムアルクロ大学、キング・サウド大学、サウジアラビア・メディナのイスラーム大学など、主として中東地域でイスラーム学を修めていることがわかる。

3-2-2. 1997年当時のマドラサの状況

ここでは設立から10年ほど経過した1997年に作成されたパンフレットから、当時のマドラサを振り返ってみたい[Introducing Madrasa Islamiyya, 1997]。当時、このマドラサが提供していた教育段階は、就学前教育 Nursery 3年間、初等教育 Primary level 5年間、後期初等教育 Middle school 3年間で、生徒の総数は412人であった。1998年までに前期中等教育の創設が予定されていたが、この時点ではまだ開校されていない。

ディベヒ語、英語、数学を除く教授言語にはアラビア語が使用された。アラビア語を教授言語としているのは、このマドラサの大きな特徴である。また、初等教育のカリキュラムには、モルディブのナショナルカリキュラムとエジプト教育省が編纂した初等教育カリキュラムを統合した混合カリキュラムが導入された。同様に後期初等教育のカリキュラムにも、アズハル・インスティテュートとアズハル大学の連携で編纂されたカリキュラムが導入された。このカリキュラムは、エジプト教育省によって認可されたものである。このようにエジプトを範とするカリキュラム編成がマドラサに導入されたことも、モルディブのイスラーム教育のもう一つの特徴である。この他、ノンフォーマル教育としてクルアーン暗誦クラス、クルアーンおよびタジュイド学習のためのクラスが開講され、のべ728人が学んでいたとされる。また、マドラサ卒業生のために、首都マーレで勉強するための奨学金が15人分、パキスタンに留学するための奨学金が3人分、用意された。

パンフレットには、学校設立の目的が以下のように表現されている。この学校設立の目的からも、少なくとも1997年までは私立マドラサとしてイスラームの教えに忠実なマドラサであったことがわかる。

1. イスラーム的価値を堅持し、クルアーンの言語であるアラビア語を復活させるためにあらゆる努力をすること
2. アッラーの教えを奨励し、若い世代にイスラームの覚醒をしっかりと確立すること
3. 輝かしいクルアーンと預言者の伝統に則ったイスラームの教えを普及すること
4. アッドゥ以外の島々に、可能ならばどこでも、クルアーン暗誦クラスを設立する努力をすること
5. アッドゥ以外の島々に、クルアーンとタジュイド(確立された法則にしたがってクルアーンを読誦する芸術)を教えること
6. モルディブにおけるイスラーム的団結を促進し、あらゆる正当な方法で社会の悪と闘うために最大限努力すること

注)アッドゥ以外の島々には首都マーレを含む

3-2-3. 2000年以降の展開

ところが2000年に状況は一変する。2000年、中央政府により強制的に私立マドラサから国立初等中等学校へと移管され、カリキュラムおよび教授言語の変更が行われた。具体的には、カリキュラムにはナショナルカリキュラムが使用され、教授言語として英語が採用された。この突然の私立から国立への移管、さらにマドラサから特定の宗教にもとづかない初等中等学校への変更の背景には、このマドラサが海外の急進的なイスラームと関係をもっていると政府が判断したためであったとされている。マドラサ設立関係者のなかには閉鎖直前に逮捕された者もいた。また、このマドラサの設立に中心的な役割を果たしていたシャイフ・イドゥリス・フセインは間一髪で逮捕を免れ、マラウイに渡ったといわれている。

その後、2004年に8年生から10年生を対象とする前期中等学校に移行した。そしてさらに2000年、11年生から12年生を対象とする後期中等学校に移行し、校名がアッドゥ・ハイスクールに変更となった。

2000年の国立化以降、前述のシャイフ・イドゥリス・フセインはマラウイに留まり、同地にマドラサを設立、現在もマラウイに滞在している。シャイフ・フサイン・ラシード・アフメドはイスラーム宗教学者としての研究を続けると同時に、ムハマド・ナシード大統領体制期(2008年から2012年)に宗教国務大臣を務めた。現在も精力的に研究を行い、多数の著作を出版している。シャイフ・イブラヒム・ルシュディは、マドラサの国立化以降、いったん同学校の教職を離れるが、現在、再びアッドゥ・ハイスクールで教員としてイスラームを教えている。

次の表3-1は、マドラサ・イスラミヤ(現アッドゥ・ハイスクール)の生徒数の推移(1994-2011年)を示したものである。この表から、マドラサ・イスラミヤがどのように変遷していったかが理解できる。具体的には、1994年から2000年にかけて徐々に対象とする学年を増やしていったことがわかる。生徒数は年度によって増減している。そして、国立化された2000年の時点では、就学前教育段階(ナーサリーおよび幼稚園)から10年生までを対象とする学校になっていた。2000年以降、就学前教育段階は廃止され、1年生から10年生を対象とする学校となり、さらに2004年以降は、原則として8年生から10年生を対象とする学校となった。そして2011年には移行期のために10年生を残しながらも、最終的には現在と同様11年生と12年生を対象とするハイスクール(後期中等学校)へと変貌をとげた。

このようにモルディブでは、私立学校から国立学校への移管、そして対象とする教育段階の変更が政府主導のもと、これまでに少なからず実施されている。このことの是非を論ずることは本研究の主旨ではない。しかし、モルディブにおける教育政策の特徴として挙げることはできるであろう。

表 3-1 マドラサ・イスラミヤ(アッドゥ・ハイスクール)の生徒数の推移(1994-2011)

	就学前教育			初等教育							前期中等			後期中等		Total
	Nr	K1	K2	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	
1994				37	55	41	36	19	5		10					203
1995		51	46	24	38	54	42	35	20							310
1996		34	51	36	22	35	52	39	33	19	19					340
1997	31	54	42	49	28	35	47	52	24	29	25	8				424
1998	35	52	57	31	31	28	28	41	44	28	18	11				404
1999	22	46	52	32	19	17	27	17	28	15	19	18	9			321
2000	49	58	53	31	25	17	15	24	18	33	15	19	14			370
2001				24	26	18	17	13	22	14	28	23	8			193

2002				14	12	17	15	14	11	19	10	28	16			156
2003				0	12	14	13	0	11	7	7	8	26			98
2004									15		116					131
2005											197	94				291
2006											206	130	93			429
2007											215	167	97			479
2008											183	167	146			496
2009											159	184	168			511
2010												137	164			301
2011													120	140	119	379

[School Statistics, Ministry of Education, 1994-2011 より作成]

3-2-4. 設立者たちの経歴

次に、マドラサ・イスラミヤの設立に関わった2人のイスラーム学者、つまり、シャイフ・イブラヒム・ルシュディ氏とシャイフ・フサイン・ラシード・アフメド氏のライフヒストリーを追うことで、モルディブにおけるイスラーム学者・指導者像を描きたい。

シャイフ・イブラヒム・ルシュディ (1955ー、アッドゥ環礁・ヒッタドウ出身)

シャイフ・イブラヒム・ルシュディ氏(以下、ルシュディ)は、1955年9月12日にアッドゥ環礁・ヒッタドウに生まれた。両親もヒッタドウ出身である。聞き取りによるとルシュディ氏の学習の遍歴は以下のようであった。1960年、5歳になると近くのマクトゥブに通い始めた。マクトゥブは教師の家で朝の3時間、アラビア語およびディベヒ語を勉強した。マクトゥブの教師との関係は非常に近く、勉強以外の時間も、子どもたちは教師の後について一日を過ごしたという。教師が掃除をするときにはそれを手伝い、漁にでかけるときには一緒に後をついて行った。マクトゥブの教師は単純にアラビア語とディベヒ語を教える教師であることに留まらず、一つの大人のムスリムとして模範的な生き方を示すロールモデルとしての役割も負っていたようだ。

マクトゥブでの学習を一通り終えた後、年齢としては12歳になった1967年から、今度はアッドゥ環礁にあるマドラサ(学校名は不明)で学んだ。学習内容はクルアーン、キターバの他、英語や数学も学習したという。キターバとはアラビア語の書き方を学ぶ科目(handwriting subject)である。ここでルシュディ氏は1970年まで学んだ。

その後、15歳からルシュディ氏は海外にわたり、イスラーム学を深めることになる。15歳になった1970年にインドへ渡り、まずはグラジュルタ・マクド・ジャミア・イスラミア・ダベ Gurajurta Makd Jamiah Islamia Dabee で学び始める。ここでの学習は1971年までである。インドに渡った経緯は、のちに共にマドラサ・イスラミヤの設立に携わる前述のシャイフ・イドゥリス・フセイン氏が1970年以前からすでにインドに滞在しており、そのイドゥリス氏がモルディブに一時帰郷した際、インドで学習するようルシュディ

イ氏を誘ったことが始まりであった。このマドラサでは主として、クルアーンの暗誦、ウルドゥ語を学んだという。教授言語はウルドゥ語であった。

17歳になったルシュディ氏は1972年になると、同じインド国内のグジャラートにあるマドラサ・ムフタフル・ウリム Madrasah Muhtaful Ulim で学び始めた。ここではクルアーン、ハディース、フィクフ(イスラーム法)、マンティーク(アラビア語修辞学)から学習を始めたという。この際、アラビア語で書かれた宗教注釈書であるキターブ・ムフタフル・クルアーン Kitab Muhtaful Quran はウルドゥ語に翻訳され、解釈されたという。この他、ペルシャ語で書かれた宗教注釈書であるキターブ・アンディダム・グリスタン kitab An didam Guristan、ボスタル Bostal、カリマ Karima、パンドウマナ Pandumanaも同時に学習した。このマドラサで多くを学んだ教師はシャイフ・サディ氏 Sh.Sadi であった。ここでの学習は21歳になる1976年まで続けられた。

21歳でインド・ボンベイにあるモスクのイマームに就任する。1976年から1978年にかけて1年半の期間である。その後、23歳にいったんモルディブに戻り、1979年に結婚をする。ルシュディ氏の妻となる女性はイドリス氏の親族であったため、その後、ルシュディ氏とイドリス氏は親族関係をもつこととなった。24歳に妻を伴い、再びインドへ向かい、マハラيشु・モスク Maharaiht のイマームに就く。その後、妻は娘の出産のため1980年にモルディブに帰国する。

そして25歳になった1981年、今度はパキスタンへ渡航する。この期間は1年間であった。パキスタンに渡航した理由は、パキスタン経由でサウジアラビアへ行くためであったという。当時、パキスタンはサウジアラビアとのコネクションをもっていたとされる。

26歳になった1982年、当初の目的通り、サウジアラビアに留学を果たす。同地ではマディナ大学 シャリア学部で学び、マディナ大学から奨学金も得ていた。マディナ大学で学位を取得したのは1986年、ルシュディ氏30歳のときであった。学位取得後の同年、ルシュディ氏は故郷のアッドゥ環礁・ヒッタドゥに戻った。そして、32歳のとき、同年1988年にマドラサ・イスラミヤの設立に携わることになる。

1988年以降、マドラサ・イスラミヤでは教師としてシャリアを教えた。しかし2000年にマドラサ・イスラミヤの閉鎖と国立学校への移管が起こったため、いったんマドラサ・イスラミヤの教職を辞することになる。その後、再び国立へ移管された後の初等・中等学校で科目としてのイスラームを教える教師となり、現在に至っている。

シャイフ・フサイン・ラシード・アフメド (1957ー、アッドゥ環礁・ヒッタドゥ出身)

シャイフ・フサイン・ラシード・アフメド氏(以下、フサイン)は、1957年3月18日にアッドゥ環礁・ヒッタドゥに生まれた。父のアフメド・マニクファアン氏(Ahmed Manikfaan、正式には Seenu Hithadhoo Thubbege Ali Thakkhaanuge Ahmed Manifaan)は、モルディブ南部で著名なイスラーム学者であった。そして母のアイシャ・マニクファアン(Aishath Manikfaan、正式には Ali Manikuge Aisha Manikfaan)は、モルディブ南部で著名なイスラーム学者であったシャイフ・フサイン・ラハア(Sheikh Hussain Rahaa、正式には Sheikh Hussain Sharafuddin Al-Azhary)の姪であった。

このフサイン氏の母の叔父にあたるフサイン・ラハアは、前述したようにアッドゥ環礁で最初にマドラサを設立した人物であり、3つの環礁の環礁長となった後、アッドゥに独立政府を作ろうとしたかどで追放された人物である。

フサイン氏の教育歴は以下の通りである。幼年期、フサイン氏はまず父親であるアフメド・マニクフアンが主宰するマクタブ・ウィオーム(Makthabul U'ioom)で、クルアーン、イスラーム学、アラビア語、ディベヒ語を学んだ。その後、13歳になる1970年に、アッドゥ環礁・ヒッタドゥにあるマドラサ・フサイニヤ(Madrasathul Husainiyya)で学び始め、さらに14歳になる1971年から1972年にかけて、同地域にあったノオラアニ・スクール(Noorani School)で学んだとされる。フサイン氏はこの頃にはクルアーン暗誦者を意味するハフィーズになっていたようである。

アッドゥ・ヒッタドゥでの教育を終えたフサイン氏はインドに渡り、イスラーム学をさらに深めることになる。インドのバルシュ(Bharuch)にあったジャミア・ダルル・ウルム・マトリワラ(Jamia Darul Uloom Matliwala)で前期中等教育および後期中等教育段階の教育を受けた。その後、高等教育はパキスタンとサウジアラビアに渡る。学士課程はパキスタンのジャミア・サアレマア・イスラミヤ(Jamia Thaleemaath Islamiyah)でイスラーム学の学士を取得し、サウジアラビア・マッカのジャミア・ウンムル・カラ(Jamia Ummul Qura)でアラビア語教授学のディプロマ、さらにサウジアラビア・リヤドのキング・サウド大学(King Saud University)においてアラビア語・イスラーム教授学のディプロマを取得している。

ルシュディ氏同様、フサイン氏も帰国後、マドラサ・イスラミヤの教育に携わることになる。フサイン氏の専門はアラビア語である。そして、マドラサ・イスラミヤの閉鎖(国立学校への移管)後は、イスラーム学者としての研究活動を深めると同時に、政治的な活動にも関与する。アドハアラ党(Adhaalath Party、英語ではJustice Party)で、最初の民主的選挙による党首に選ばれ、2006年から2011年まで党首を務めた。そして、ムハマド・ナシード大統領体制期、リヤアセ・コミッション(Riyaasee Commision)の共同議長(co-chair)に選出され、2009年11月から2010年12月まで内務省国務大臣、2010年12月から2012年2月まで宗教省国務大臣に任命されている。

イスラーム学者としてのフサイン氏は、モルディブで著名なシャーフイー派(スンニ)のイスラーム学者であり、イスラーム法学の有識者によって組織されるモルディブ・フィクフ・アカデミーの会員である。国務大臣の任期中も著作活動を活発に続け、多数の著作がある。

シャイフ・イドゥリス・フセインおよびその他の設立関係者たち

マドラサ・イスラミヤの指導的存在であり、かつ前述のルシュディ氏たちを育てたシャイフ・イドゥリス・フセイン氏(以下、イドゥリス)は、2000年の閉鎖後、マラウィに渡り、マドラサを設立(学校名は不明)した。現在は年に一度、モルディブに戻ってくる以外はマラウィに在住し、設立したマドラサを主宰しているとされる。イドゥリス氏の子どもたちはアッドゥ環礁・ヒッタドゥに在住している。

この他、シャイフ・アブドゥル・ラティーフ・ウマル氏(以下、ラティーフ)は、関心を共にする人たちとともに地元のヒッタドゥで私立のイスラーム幼稚園を設立し、その経営に携わっている。その幼稚園には、ルシュディ氏の娘も教師として勤務しており、マドラサ・イスラミヤ閉鎖後のヒッタドゥにおけるイスラーム教育の発展が志されている。現在は就学前教育段階のみであるが、将来的にはマドラサ・イスラミヤのように初等・中等教育段階も提供することが目標とのことであった。

私立イスラーム学校の変容

以上みてきたように、マドラサ・イスラミヤ(アッドゥ・ハイスクール)の歴史的変遷は、ローカルな人々による民間のイスラーム教育と、政府主導の国民教育の一つの葛藤を示唆している。つまり、ローカルな人々のイニシアティブと財源で設立されたマドラサ・イスラミヤであるが、ある時点を境に国立へと移管される。しかも、その変化は私立から国立への移管にとどまらず、マドラサ教育の柱ともいえるイスラーム諸学やアラビア語の学習から非宗教的な学習への転換、さらに教授言語としてのアラビア語の英語への転換という、いわばカリキュラムや教育理念の根本的な変容を意味するものである。

このような変化が、モルディブ全域で起こっていると現時点で結論づけることはできない。そのため、アッドゥ環礁の事例を安易に一般化することは適切ではない。したがって、仮にその結論に至るにはさらなる調査研究が必要とされる。

しかし非常に限られた知見ではあるが、現在、後述するマーレ島以外の環礁で、イスラーム諸学を教える初等教育段階あるいは中等教育段階のマドラサはほとんど見られない。そこで、教育省が毎年発行する学校教育に関する統計を経年的にみても、一つの傾向があることに気づく。つまり、初等中等教育段階のマクトゥブやマドラサといった私立のイスラーム教育機関は徐々に減少し、近年、私立イスラーム教育機関の多くは就学前段階に集まる傾向がある。これを詳しくみるために、表 3-2 と表 3-3 を示したい。どちらの表もアッドゥ環礁の学校統計であるが、表 3-2 は 1992 年、表 3 は 2011 年のものである。表のなかの G は国立、C はコミュニティ立、P は私立を意味する。この 2 つの表から示唆される傾向を以下、指摘したい。

表 3-2 アッドゥ環礁における学校数および生徒数(1992)

	学校名	設置	就学前教育			初等教育							前期中等教育			特 SP	Total
			Nr	01	02	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10		
01	Atholhu Thaulaemee Maraukazu	G				114	66	76	85	116	114	99					670
02	Atholhu Madharusaa	G				114	83	98	93	107	83	77					655
03	Hithadhoo School	G		112	113												225
04	Maradhoo-Feydhoo School	C				44	31	29	28	24	29	19					204
05	Maradhoo School	C		44	51												95
06	Meedhoo School	C		20		48	27	36	34	23	17	18					223
07	Hulhudhoo School	C		43	34												77
08	Feydhoo School	G				144	97	88	70	51	34	12					496
09	Medhuvalu School	P			10	26	27	33	30	26	27						179
10	Nooranee School	P		136	143	149	133	141	130	118	86	76					1112
11	Madhurasathul Shaafee	P				6	7	4	4	2							24
12	Mukthabul Asriyyaa	P		11	18												29
13	Hasanee Makthab	P		8	4												12
14	Hidhaaiyya Makthab	P		18	7	7	7	7	5	5							56
15	Mukthabul Hidhriyaa	P			23												23
16	Madhrasathul Islamiyya	P		29	37	27	39	43	29	11	14	20					249
17	Madhrasathul Irushadhiyya	G				75	85	83	35	45	46	17					386
18	Southern Secondary School	G											285	54			339
19	Aeodemie School	P		43	35	57	34	15	20		18	10					232
	Total	19		464	475	811	636	653	563	528	468	348	285	54			5285

[School Statistics, Ministry of Education, 1992 より作成]

表 3-3 アドゥ環境における学校数および生徒数(2011)

	学校名	設置	就学前教育			初等教育							前期中等			後期中等		特	Total	
			Nr	01	02	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	SP		
01	S.Atholhu Madharusaa	G											89	62	53					204
02	S.Atholhu Thauleemee Maraukazu	G				72	68	83	75	76	93	129							23	619
03	Feydhoo School	G				42	47	59	59	41	55	71	21	45	46					486
04	Hithadhoo School	G				90	84	104	96	105	117	151								747
05	Irushaadhiyya School	G											68	35	53					156
06	Muhibudheen School	G											191	171	197	117	80			756
07	Shamsudheen School	G				35	20	22	37	25	26	44								209
08	Hulhudhoo School	G				15	23	22	26	28	26	32								172
09	Maradhoo School	G				46	31	41	49	37	48	49								301
10	Maradhoo-Feydhoo School	G				20	18	24	22	17	18	50								169
11	Almadhrasathul Islamiyya	G												137	164					301
12	Asriyya Thuththukudhinge Thauleemudhey Class	P	9	7	13															29
13	Medhuvalu School	P	107	82	115															304
14	Nooranee School	P	39	50	62	26	28	23	18	18	23	22								309
15	Saeedhiyya Pre-School	P	81	53	49															183
16	Shareefee Pre-School	P	32	20	35															87
17	Nasriyya Pre-School	P	23	16	35															74
18	Kudhima Pre-School	P	65	48	50															163
19	Ujaalaa Pre-School	P	36	34	32															102
20	Amaan Pre-School	P	62	34	51															147
21	Hiriya Pre-School	P	39	16																55
	Total		21	493	360	442	346	319	378	382	347	406	548	369	450	513	117	80	23	5573

[School Statistics, Ministry of Education, 2011 より作成]

第一に設置主体の変化である。1992年の学校数は全部で19校、その内訳は国立6校、コミュニティ立4校、私立9校である。一方、2011年の学校数は全部で21校、その内訳は国立11校、コミュニティ立0校、私立10校となっている。この間にコミュニティ立から国立へと設置主体が代わった学校は、Hulhudhoo School(表3-2で07番、表3で08番、就学前教育から初等教育へ転換)、Maradhoo School(表3-2で05番、表3で09番、就学前教育から初等教育へ転換)、Maradhoo-Feydhoo School(表3-2で04番、表3-3で10番、初等教育を提供)である。また、私立から国立へと設置主体が代わった学校は、前項で考察したマドラサ・イスラミヤ(表3-2で16番、表3-3で11番、就学前・初等教育(1992年時点)から前期中等教育(2011年時点、これ以降、後期中等教育へ転換)である。

第二に学校名称の変化である。1992年の時点では、アラビア語で教育機関を表すマクタブ(Mukthabul や Makthab)およびマドラサ(Madhurasathul)を冠する学校が私立学校を中心に7校(マクタブは表3-2で12,13,14,15、マドラサは表2で16,17)あったが、2011年の時点になると、前項で考察したマドラサ・イスラミヤのみで、前述したようにマドラサ・イスラミヤも実はこの時点ではすでにアッドウ・ハイスクールに名称変更となっている。国立の Madhrasathul Irushadhiyya(表3-2で17番、表3-3で05番)は2011年には Irushadhiyya School となり、School が学校名称として使用されるようになっていく。ここでモルディブにおける学校名称で留意しなければならないのは、名称としてマドラサを冠していても、必ずしもイスラーム学校ではないということである。マドラサはアラビア語で学校一般も意味するため、学校の名称としてマドラサを使用している場合があるのである。Madhrasathul Irushadhiyya はこのケースに当たる。また、1992年の時点で Mukthabul Asriyyaa(表3-2で12番、表3-3で12番)は私立の教育機関であるが、マクタブを学校名称から外シクラスという名称に代わっている(どちらの時点も就学前教育を提供)。そして、いずれも私立の Madhurasathul Shaafee(表3-2で12番)、Hidhaaiyya Makthab(表3-2で14番)、Ha Makthab(表3-2で13番)、Mukthabul Hidhriyya(表3-2で15番)は2011年の学校統計には表れていない。筆者の推測では、おそらくその多くが閉校に至ったと思われる。しかし、就学前教育のプレ・スクールに転換した学校があるかもしれない。また、1992年には存在した国立の Southern Secondary School と私立の Aeodemie School も2011年の統計ではなくなっている。

第三に、1992年の時点では私立学校も初等教育を提供していた(表3-2の09番、10番、11番、14番、16番)。ところが、2011年になると私立学校は、Nooranee School(表2の14番)を除き、就学前教育だけを提供するようになっていく。つまり、初等教育段階以上は国立学校によって占められている(そのなかにはマドラサ・イスラミヤのように私立から国立へ移管されたものもある)。私立の学校は就学前教育段階しか任されなくなったという解釈も可能であろう。そして1992年にはなかったプレ・スクールという学校名称を冠した新しい私立学校が設立されている。筆者が調査をした限りではあるが、たとえば Hiriya Pre-School は英語教育とともにイスラーム教育も同時に行なっている就学前学校であり、初等教育段階以上でイスラーム教育を行うことは難しいが、就学前教育段階ではある程度、自由に実践されているのではないかと推測される。第四に、1992年の時点で前期中等教育を提供する学校はわずか1校(表3-2の18番)、つまり国立の Southern Secondary School のみであったが、2011年になると国立の5校で前期中等教育が提供されている。さらに1992年にはなかった Muhibudheen School (表3-3の06番)では後期中等教育が提供されている。またマドラサ・アラビアから転換したアッドウ・ハイスクールで後期中等教育

が提供されるようになったことは前述した通りである。つまり、アッドゥ環礁で後期中等教育が2校で提供されるようになってきている。このように、マーレ以外の環礁においても次第により上級段階の教育が提供されるようになってきている。

また表には示していないが、教員の観点からみると、私立学校では唯一初等教育も提供している Nooranee School(表 3-3 の 14 番)が外国人教員を3人雇用している以外、私立学校はすべてローカルな教員を雇用している。しかし、教育段階が上がるにつれ、外国人教員の割合は上昇している。具体的には、前期中等教育を提供する S.Atholhu Madharusaa(表 3-3 の 01 番)の教員構成は32人の教員中、外国人教員が14人、ローカル教員が18人、初等・前期中等教育を提供する Feydhoo School(表 3 の 03 番)は58人の教員中、外国人教員が24人、ローカル教員が34人、前期中等教育を提供する Irushaadhyya School(表 3-3 の 05 番)は27人の教員中、外国人教員が11人、ローカル教員が16人、そして最後に前期・後期中等教育を提供する Muhibudheen School(表 3 の 06 番)は85人の教員中、外国人教員が54人、ローカル教員が31人となっている。初等教育段階のみを提供する国立学校においても平均して数名ほどの外国人教員が雇用されている[MOE 2011:72]。この背景には英語を教授言語とするモルディブの学校において、英語が話せるインド人やスリランカ人が雇用される傾向があること、あるいは外国人教員に頼らざるを得ない状況があることを示している。

以上のことから、少なくともアッドゥ環礁地域においては、国家による教育普及が推進されるなかで、ローカルな人々によって担われてきたイスラーム教育が大きな変容を経験したといえるだろう。そしてこのような状況はある程度、モルディブ全域でもみられる傾向ではないかと推測される。

4. 首都マーレへの集中化

一方で、イスラーム教育のマーレへの集中化が起こっている。中央政府は国立のイスラーム教育機関を設立し、国家が管理する形でマーレにおけるイスラーム教育の充実を図っている。その背景には、急進的なイスラームのモルディブへの影響を懸念し、穏健なイスラーム国家の建設を目指す政府の意図があるといわれている。小規模国家であるモルディブは海外からの影響を受けやすい。このことが、イスラーム教育を中央のマーレで管理・発展させようとする政府の姿勢につながっているのであろう。本項では、これを考察するために、初等中等教育段階のマドラサ・アラビア・イスラミヤ、中等後教育段階のイスラーム学院(のちにイスラミック・カレッジ)、聖クルアーンセンターについてとりあげたい。

4-1. イスラーム学院 (Institute of Islamic Studies)

1980年11月9日に設立されたイスラーム学院は、当初は後期中等教育機関として発足し、その後2004年に、学校名称をイスラーム学院からイスラミック・カレッジ(Islamic College)に変更する

と同時に、高等教育を提供する機関に再編された経緯をもつ。そのため、それまでイスラーム学院が担ってきた後期中等教育は後述するマドラサ・アラビア・イスラミヤで提供されるようになり、マドラサ・アラビア・イスラミヤは初等教育および前期・後期中等教育を担うようになった。

イスラーム学院が設立された1980年は、前述したように1978年に大統領に就任したマウムン・アブドゥル・ガユームの政権期に、政府が様々な形でモルディブ国民の宗教的自覚を高める事業を展開した時期である。また1978年に起きたイラン・イスラーム革命を契機に、イスラーム復興が起り始めた時期とも重なる。そのような時代状況のなかで設立されたイスラーム学院は、イスラーム精神を強化し、質の高いイスラーム教育を提供することを目的としていた。

アラビア語を教授言語とし、その教育課程はエジプトのアズハル大学から認定を受けており、モルディブの生徒たちに、海外に出ることなく国際的に認定された教育システムにアクセスする機会を提供し、さらに高等教育段階での海外への留学を可能にするものであった。

1990年当時の記録によると、イスラーム学院では様々なプログラムが提供されている。たとえば、イマームや裁判官、弁護士を養成するプログラム、クルアーン教師養成、コリ(Qari)養成(クルアーン暗誦、正しくクルアーンを暗誦するサポートをする役割を負う)、アラビア語プログラムなどである。同時に、学校におけるイスラーム教育カリキュラム(8年生以上)と教科書の作成、アラビア語とクルアーン暗誦を学習できるラジオプログラムの作成も行われている [Islamic Heritage, Department of Religious Affairs, 1990, 28-31]。

そして後期中等教育課程は4年間で編成され、科学(Science)ストリームと教養(Arts)ストリームに分かれていた。両ストリームに共通する科目は、アラビア語、クルアーン、タフシール、フィクフ、ハディース、タウヒード、英語、ディベヒ語であり、これを含めて1年間に17科目が学習された。上述の共通科目にもイスラーム・アラビア語関連科目が多数入っているように、概ね4割がイスラーム・アラビア語関連科目から構成されていた [Hassan Hameed and Adam Moosa, 1995, 3-12]。つまり、アラビア語が教授用語である上に、イスラーム・アラビア語関連の科目がかなり重視されていたことがわかる。

後期中等教育の修了証は、Al-Shgahadath Al-Sanawiyya とよばれるものであるが、この修了証はアズハル大学(エジプト)、メディナ・イスラーム大学(サウジアラビア)、クリヤトゥル・ダウワトゥル・イスラミヤ(リビア)で認められているため、前述したように高等教育段階のイスラーム教育を海外で学びたい生徒たちの海外留学を容易にしている。

イスラーム学院に対して海外からの支援もあった。たとえば、アズハル大学からは15人の教師が招聘され、給料と交通費はアズハル大学が、宿泊費等はモルディブが負担した。また必要なすべての教科書がアズハル大学から提供された。この他にも、教師派遣に関してはリビア、サウジアラビア、パキスタンからの支援があり、さらにサウジアラビアとクウェートからは財政支援があったとされる [Post-Secondary Education Study, vol.2, 1997, 1-12]。その後、前述したように2004年、イスラーム学院はイスラミック・カレッジに再編された。

4-2. マドラサ・アラビア・イスラミヤ (Madrasah Arabiyya Islamiyya)

マドラサ・アラビア・イスラミヤは、前項でみたイスラーム学院の入学希望者が増加したことから、政府によって1987年2月8日に設立されたマドラサである。この学校の方針として、1)アラビア語を教授言語とし、中等教育段階までのイスラーム教育を提供する、2)ムスリムの若者が信仰深く、真理を愛し、愛国心を持ち、責任感をもつことができるよう育成する、3)イスラーム教育を普及させようとする政府の努力を支援することが示されている。

2004年にイスラーム学院がイスラミック・カレッジに再編される以前は、この学校で前期中等教育修了証(Shahada I' dadiyya)を修得した生徒は、後期中等教育のためイスラーム学院に進学することが可能であり、修了証はイスラーム学院同様、アズハル大学から認定を受けていた。そして2004年、イスラーム学院が担ってきた後期中等教育をマドラサ・アラビア・イスラミヤが担うことにより、マドラサ・アラビア・イスラミヤは初等中等教育段階(Grade1-12)を提供するようになった。

このマドラサ・アラビア・イスラミヤの最大の特徴は、教授言語としてアラビア語と英語、カリキュラムとしてモルディブ・ナショナルカリキュラムとアズハル・カリキュラムを併用することにある。具体的には、1年生から5年生は教授言語として英語を用いてモルディブのナショナルカリキュラムを教え、その上で追加的にアラビア語・イスラーム関連科目をアラビア語で教える。アラビア語・イスラーム関連科目はアズハル・カリキュラム(シラバス)が使用される。さらに追加的に非アラビア語・イスラーム関連科目についてもアラビア語で書かれた教科書をアラビア語で教えている。たとえば5年生では英語を教授言語として教える「科学」がある一方で、アラビア語を教授言語として教える「アラビア科学」もある。「アラビア科学」の教科書はすべてアラビア語で書かれている。つまり、子どもたちはアラビア語・イスラーム関連科目についてはアラビア語で書かれた教科書を使ってアラビア語で学習し、非アラビア語・イスラーム関連科目については英語で書かれた教科書を使って英語で教えられると同時に、アラビア語で書かれた教科書を使ってアラビア語で教えられるのである。インタビューした教師によれば、同じ教科書を2つの言語で学習することにより、理解が深まるとのことであった。6年生以降になると、英語とディベヒ語以外はすべてアラビア語で書かれたアズハル大学が作成する教科書を使い、アラビア語で教えられるようになる。前述のように科学、数学もアラビア語で教えられる。10年生からは科学ストリームと教養ストリームに分かれる。教員数は66人で、エジプト人教師の割合が高く、ローカルの教師は中東諸国の大学かモルディブのイスラミック・カレッジを卒業している割合が高いことが特徴である。

2011年に訪問した当時は、教室不足から午前と午後の2部制をとっており、午前中は5年生および7年生から12年生、午後は1年生から4年生および6年生の子どもが通っていた。そのため、マーレ島内に新校舎を建設中で、私立カレッジのマドゥ・カレッジ(Madhu College)に間借りしていた時期を経て、2013年2月末に訪問した際には新校舎への移動を行っている最中であった。

4-3. 聖クルアーンセンター(The Center for Holy Quran)

聖クルアーンセンターは、2000年12月22日に政府によって設立されたノンフォーマル教育センターである。イスラーム学院とマドラサ・アラビア・イスラミヤが主として初等教育から中等教育段階の正規の教育を提供するのに対し、聖クルアーンセンターは就学前教育および成人を対象とするノンフォーマル教育を提供することで、国民の宗教意識の向上とイスラーム諸学に関する基礎知識および実践の向上をめざすことが目的で設立された。

2011年時点で7つのコースを提供し、それぞれに修了証書が出されていた。コースとしては、クルアーン朗誦(キラア)コース、クルアーン暗誦コース、アラビア語コース、イスラーム教師養成コース、クルアーン教師養成コースなどである。授業料はすべて無料であり、2011年には2,111人が受講していた。

また聖クルアーンセンターが主催する恒例の行事として、全国クルアーンコンテスト(National Quran Contest)がある。2011年の大会では全国から選抜された784人が出場していた。選抜過程は、①島単位で設置されたIsland Councilから15人を選抜、②環礁単位でコンテストを実施し、Atoll councilから15人を選抜、③最終的に環礁から選抜された参加者が、全国大会である全国クルアーンコンテストに参加できるという仕組みになっている。

実は上述のIsland Councilとは政府が進める政策で2011年頃までに187のすべての住民等に設置されるもので、主として政府のイスラーム政策を普及するための各島の拠点となるものである。同時に、全住民島には聖クルアーンセンターが認証するクルアーン・クラスが設置されるようになっている。

5. モルディブにおけるイスラーム教育の特徴

以上、ここまでモルディブ全域およびアッドゥ環礁におけるイスラーム教育の展開と、1980年以降のマーレ島を中心とするイスラーム教育の展開に焦点を当てて考察してきた。本項ではこれらの考察から導き出されるモルディブにおけるイスラーム教育の特徴を指摘しておきたい。

第一に、1970年代から1980年代における政府による積極的なイスラーム政策は、モルディブ国民の宗教的自覚を高めることを目的とする一方で、中央政府によって作られる官製のイスラームが、地方の環礁(アトール)に浸透し、結果として多様性をもった地方のイスラームが画一化の方向へ収斂された。この過程のなかで、イスラームの中心としてのマーレ島と、周縁のイスラームとしての地方の環礁(アトール)という図式が形成されたといえる。

第二に、1970年代における英語を教授言語とする学校の設立と統一された国家教育システムへの移行は、教育の地域的伝統が、英語を教授言語とするイギリス式の教育システムへと統合される結果をもたらした。そして同時に、私立学校から国立学校への移管は国民教育を促進する一方で、地域のイニシアティブを失速させる結果となったといえる。つまり、初等中等教育段階のマクトゥブやマドラサといった私立のイスラーム教育機関は徐々に減少し、近年、私立イスラーム教育機関の多くは就学前段階に集まる傾向がある。事例として取り上げたマドラサ・イスラミヤ(ア

ッドゥ・ハイスクール)の歴史的変遷は、ローカルな人々による民間のイスラーム教育と、政府主導の国民教育の一つの葛藤を示唆している。

第三に、イスラーム教育のマーレへの集中化が挙げられる。中央政府は国立のイスラーム教育機関を設立し、国家が管理する形でマーレにおけるイスラーム教育の充実を図っている。その背景には、急進的なイスラームのモルディブへの影響を懸念し、穏健なイスラーム国家の建設を目指す政府の意図がある。政府の意図は1980年以降、政府によるアズハル大学への留学送り出しが始まったことにも表れている。小規模国家であるモルディブは海外からの影響を受けやすい。このことが、イスラーム教育を中央のマーレで管理・発展させようとする政府の姿勢につながっているのであろう。

第四に、モルディブにおけるイスラーム教育の特徴の一つとして教授言語としてのアラビア語の位置づけが挙げられる。マドラサ・イスラミヤ(アッドゥ・ハイスクール)においても、マーレ島に設立されたマドラサ・アラビア・イスラミヤにおいてもアラビア語が教授言語として使用されていた。このような形態はインドネシアやマレーシア(国際イスラーム大学は教授言語を英語またはアラビア語としているものの)では一般的ではない。また、マドラサ・アラビア・イスラミヤの卒業生がアズハル大学に留学する際、イスラーム諸学に限らず、非宗教系の学部への希望も多いという。つまり、アズハル大学留学イコール宗教の学習という図式はモルディブには当てはまらない。ここにもモルディブの特徴が現れているといえる。

おわりに—残された課題

本稿は2010年から2013年にかけて行なった調査をもとに、モルディブにおけるイスラーム教育の歴史的展開と変化について考察してきた。調査では各フィールド地に毎年数日間しか滞在できなかったため、収集できたデータは非常に限られたものにならざるを得なかった。また本テーマをより深く考察するためには現地語であるディベヒ語文献が重要なリソースとなるにもかかわらず、筆者の言語能力の限界から本稿ではディベヒ語文献を使用することができなかった。これは今後の研究の課題である。

今回の調査は、首都のあるマーレ島とモルディブ南部のアッドゥ環礁を中心に行った。偶然にも、アッドゥ環礁は歴史的にイスラーム教育の一つの中心地であり、著名なイスラーム学者を輩出している地域であったため、モルディブにおけるイスラーム教育の展開を考察する上で非常に示唆的な地域であった。そして、モルディブからの独立を企てるなど、アッドゥ地域としてのアイデンティティが強い地域であるため、そこでのイスラーム教育の展開は、アッドゥの特徴を示すものであっても、この事例をして他の地域を一般化することはできない。言うまでもなく、島々から構成されるモルディブの歴史・文化は多様なはずである。おそらく他の異なる環礁におけるイスラーム教育を調べれば、また異なるイスラーム教育像が見えてくるであろう。今後は他の環礁地域のイスラーム教育の展開についても比較考察することが不可欠である。

<追記>

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究(A)「発展途上国教育研究の再構築:地域研究と開発研究の複合的アプローチ」(研究代表者:山田肖子、平成21年度～24年度、研究課題番号21252007)の助成により実施した調査にもとづくものである。現地調査は2010年1月、2011年2月、2012年2月、2013年3月の4回にわたり実施した。また調査にあたってはモルディブ教育省からの強力なサポートをいただいた。厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- Bray, Mark and Khadeeja Adam. 2001. The Dialectic of the International and the National; Secondary School Examinations in Maldives. *International Journal of Educational Development*, 21(2001).231-244.
- Chandra, Ramesh. 2003. *Encyclopaedia of Education in South Asia (In 9 Volumes)(Maldivian Volume 9)*. Delhi; Kalpaz Publications.
- Department of Religious Affairs. 1990. *Islamic Heritage*.
- Ministry of Education, Republic of Maldives. 1994. *Developments in Education;1992-1994 Maldives, International Conference on Education 44th Session, Geneva,1994 (country report)*.
- Ministry of Education, Republic of Maldives. 1992. *School Statistics*.
- Ministry of Education, Republic of Maldives. 2011. *School Statistics*.
- Saeed, Sheema. 2003. *Maldivian Ways of Knowing; An Inquiry into Cultural Knowledge Traditions and Implications for Schooling*, Ph.D dissertation (University of British Columbia)(unpublished).
- Waheed, Mohamed.2003a. A Description of the Maldives. In Department of Religious Affairs. *Islamic Heritage*. 25-26.
- Waheed, Mohamed. 2003b. Islam in the Maldives. In Department of Religious Affairs. *Islamic Heritage*.26-28.
- Moosa, Ibrahim Rasheed. 1990. Religious Activities and Efforts to Increase Religious Awareness in the Maldives. In Department of Religious Affairs. *Islamic Heritage*.28-33.
- 外務省ウェブサイト
- 鴨川明子. 2010. 「モルディブにおける公的高等教育機関の動向と課題ーモルディブ高等教育カレッジの予備調査より」早稲田大学イスラーム科学研究所『イスラム科学研究』(6)、107-110 頁
- 国際協力事業団. 1980. 『モルディブ共和国学校建設計画基本設計調査報告書』